

リエール全集

3

鈴木力衛訳

中央公論社



モリエール全集 第三卷

定価 二五〇〇円

昭和四十八年三月一日初版印刷
昭和四十八年三月十日初版発行

訳者 鈴木力衛

発行者 山越 豊

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京三四番

©一九七三

検印廃止

目次

ジョルジュ・ダンダン

守銭奴

町人貴族

スカパンの悪たくみ

訳注
解説

5

75

189

297

375 381

モリエール全集

第三卷

ジ
ヨ
ル
ジ
ユ
・
ダ
ン
ダ
ン

もしくは やりこめられた亭主

GEORGE DANDIN
ou
LE MARI CONFONDU

登場人物

ジョルジュ・ダンダン 金持の百姓、アンジェリックの夫

アンジェリック ジョルジュ・ダンダンの妻、ソタンヴィル氏の娘

ソタンヴィル氏 田舎貴族、アンジェリックの父

ソタンヴィル夫人 その妻

クリタンドル アンジェリックの恋人

クロードイヌ アンジェリックの小間使

リュバン クリタンドルの使いをする百姓

コラン ジョルジュ・ダンダンの召使

舞台は田舎、ジョルジュ・ダンダンの家の前

第一幕

第一景

ジョルジュ・ダンダン

ジョルジュ・ダンダン あーあ、お姫さまなんか嫁にもらうと、ろくなことはありません。百姓の分際
で高い身分になりたいだの、貴族の娘を嫁にもらおうだのって、へんな気を起こすもんじゃないな。
このおれの結婚がいいみせしめさ！ 貴族そのものが悪いっていうんじゃない。そりゃもう、じつに
たいしたものさ。だけど、それには、いやなおまけがむやみやたらとつくんでね。あんまりひっかか
りができないほうが身のためというものさ。その点、おれはひどい目にあわされたけれど、おかげで
ずいぶん利口になった。貴族のやつらがわれわれ風情ふうせいを一族にお加えくださるとき、どんな手を用い
るものか、おれにはよく飲みこめたよ。なにしろ、あいつらが縁組えんぐみするお目あては、財産だけで、
おれたち人間なんか、どうだってかまやしないんだ。だから、いくらおれが金持だからって、あんな
貴族の娘と結婚するんじゃない。氣立てのいい、根っからの百姓娘と夫婦いっしょになったほうが、ずっ
とましだったんだ。うちの女房ときたら、亭主のおれを見くびって、おれの苗字みよじを名乗るのがいやだ、
なんてぬかすんだから。そればかりじゃない、あいつの亭主にさせていたくには、おれの財産を

全部はたいたってまだ足りない、などとうぬぼれていやがるんだ。ジョルジュ・ダンドン！ ジョルジュ・ダンドン！ おまえは、まなことをしてかしたもんだなあ。いまじゃ、自分の家にいてさえ、おっかなびっくり。帰れば、きつとなにかしら、いやな目にあわされるんだから。

第二景

ジョルジュ・ダンドン、リュバン

ジョルジュ・ダンドン (リュバンが自分の家から出て来るのを見て、傍白) はてな、妙なやつが。あいつ、おれの家になにしに來たんだろう？

リュバン (ジョルジュ・ダンドンに気がついて、傍白) あれ、あいつ、おれの顔をじろじろ見てやがる。
ジョルジュ・ダンドン (傍白) おれの顔を知らんらしい。

リュバン (傍白) あやしいとにらんでいるんだな。

ジョルジュ・ダンドン (傍白) はあ！ あいつ、あいさつがしにくいらしいぞ。

リュバン (傍白) あいつ、おいらがここから出て行くのを見たなんて、言いふらすんじゃないかな。

ジョルジュ・ダンドン 今日日は。

リュバン へえ、だんな。

ジョルジュ・ダンドン おまえ、この土地の者じゃなさそうだな？

リュバン へえ。あしたのお祭りを見に來たんで。

ジョルジュ・ダンドン そうかい。ところでちょっと訊きたいが、おまえ、いまあの家から出て來たら

う？

リュバン しーっ！

ジョルジュ・ダンダン なんだって？

リュバン お静かに！

ジョルジュ・ダンダン どうしたんだ？

リュバン しっ！ そんなこと言っちゃだめですよ、おいらがあそこから出て来たなんて。

ジョルジュ・ダンダン どうしてだ？

リュバン 弱っちまったなあ！ どうしてって……

ジョルジュ・ダンダン それで？

リュバン どうかお静かに。人に聞かれるとまずいんで。

ジョルジュ・ダンダン 聞いてなんかいるものか。

リュバン じつはいま、この家の奥さんにちよいと耳打ちをしてきたとこなんです。奥さんにぞっこんま
いつてるあるだんなに頼まれたもんでね。こんなこと、人に洩らしちゃだめですぜ。え？

ジョルジュ・ダンダン うん。

リュバン というわけですよ。だれにも見つからんようにしろって、言いつかっておりますんで。このお
いらを見かけたなんて、だれにも言わんでくださいな。

ジョルジュ・ダンダン 言うもんか。

リュバン 言いつけどおりに、こっそり事を運びたいんで。

ジョルジュ・ダンダン それは結構。

リュバン うわさによると、その亭主^{なだい}つてのが名代のやきもちやきで、女房がちやほやされるのは我慢が

ならん、というたいで、こんなことがバレたらどんな騒ぎになるか、知れたもんじゃありませんぜ。
おわかりでしょうか？

ジョルジュ・ダンダン それはもう。

リュパン 亭主にちよつとでも感づかれたら、それこそたいへん。

ジョルジュ・ダンダン だろうな。

リュパン こつそり亭主を騙だまそうっていう算段で。おわかりでしょうか？

ジョルジュ・ダンダン もちろん。

リュパン そいつの家からおいらが出て行くのを見かけたなんて、だんながしゃべったりしたら、なんにもかもオジャンです。わかつてるでしょうか？

ジョルジュ・ダンダン そりゃ、もう。ところで、名前はなんていうんだ、おまえを使いによこした人は？

リュパン おいらの郷里くわにの殿さまで、なんとか子爵きしやくっていうかただが……さてと、名前はなんていったつけなあ。クリ……そうだ、クリタンドルさま。

ジョルジュ・ダンダン 宮廷に仕えているあの若い人だね、お住まいは……

リュパン そう、あの森のそばでさあ。

ジョルジュ・ダンダン (傍白) それでだな、あのお洒落しやれ野郎がしばらく前から、わざわざ家のそばに引越してきやがったのは。おれはどうやら鼻がきくらしい。あいつが近所に来たときから、どうも臭いと思つてたよ。

リュパン まったく、はあ、あれくらい気前のええだんなは見えたこともねえ。ここの奥さんのとこへ行って、奥さんに夢中です、ぜひ奥さんとお話がしたい。使いといったって、たったこれだけこつづす

るだけでさ。それだけでおいらに金貨を三枚もくんなすった。こんなにたんまりもらうほど、骨の折れる仕事じゃねえ。だんな、この割でいったら、一日いくらになるんだべ。ふだんは日に十スーも稼げねえだに。

ジョルジュ・ダンダン　ところで、こいつの役目はすんだのかね。

リュバン　へえ。あの家にヤクローディーヌとかいう女中がおりましてね、それがすぐこっちの氣持を察して、奥さんに取りついでくれました。

ジョルジュ・ダンダン　(傍白)　ちくしょう！　女中のやつめ！

リュバン　いやまったく、そのクローディーヌってのが、とつてもかわいい娘^こでして、おいらあ、もうすっかり好きになっちゃった。あの娘さえ承知なら、夫婦^{いっしょ}になりてえもんで。

ジョルジュ・ダンダン　ところで宮仕えのその人に、奥さんはなんて返事をした？

リュバン　こう伝えてくれたことでした……待ってくださいえ、全部思いだせるかな……お心をお寄せくださって、うれしゅう存じます。ですけど、なにぶん夫が変わり者ですので、氣づかれないようにご用心のほどを。ふたりきりでお話ができますよう、なんとか考えてくださいまし。

ジョルジュ・ダンダン　(傍白)　ええい！　性悪^{しょうあく}女の女房め！

リュバン　ふんとに！　こいつは面白^{おもしろ}えことになりますぜ。亭主はこんな悪^{あく}だくみがあるなんて、氣がつきもしねえ。だからこそ愉快^{えきげき}なんで。あのやきもちやきの亭主が一杯食^くわされる。そうじゃねえですかい？

ジョルジュ・ダンダン　そうだな。

リュバン　じゃ、ごめんどさせえ。せいせい口を堅く願いますぜ。秘密は守ってくださいよ、亭主に知れないように。

ジョルジュ・ダンダン よしよし。
リュバン おいらはなに食わん顔をしているだ。ぬかりなくやれば、だれにもバレっこねえ。

第三景

ジョルジュ・ダンダン（ひとりで）

ジョルジュ・ダンダン ほらみろ、ジョルジュ・ダンダン、女房のやつにどんなあしらいを受けているか、これでよくわかっただろう！ お姫さまを嫁にもらいたなんて気を起こしたばかりに、このさまだ。どんなにひどい仕打ちにあわされても、仕返しひとつできやしない。貴族の肩書を突きつけられると、手足がすくんでしまう。身分が同じなら、亭主の面子（やんづ）にかけて、せめて恨みをはらすことぐらいはできたろうし、あいつがもし百姓の娘なら、いまごろは思うぞんぶん棍棒（こんぼう）でぶんなぐって懲らしめてやれたのに。それなのにおまえは、貴族の匂い（におい）をかいでみようとしたり。お山の大將（たいしょう）だけじゃ満足できなかったんだ。ええい！ 腹が立つ！ 自分で自分のほつたをひっぱたいてやりたいよ。なんだと！ よくも色男の甘い言葉なんか耳をかし、おまけに、すぐ返事をするなんて約束できたもんだ！ ちくしょうめ！ こんな絶好の機会をのがしてなるもんか。この足で、おやじとおふくろのところへ文句をつけに行つてやろう。あいつらの娘がこのおれにどんな苦しみや悲しみの種を蒔（ま）いているか、はっきりした証拠を見せてやろう。おっと、ちよいどいいところへ、ふたりそろつてやつて来た。